

# 法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227  
ブログ <https://hokke-commons.jp> /メールアドレス [hokkecommons@gmail.com](mailto:hokkecommons@gmail.com)

## 巻頭言

### 未来を拓く学びを、法華の共有地で！

法華コモンズ仏教学林事務局長・八王子善龍寺住職 澁澤 光紀

この令和五(二〇二三)年度の前期講座から、本学林の活動は七年目に入ります。いま、本学林のブログに載せる「沿革」を編集集中ですが、本学林の前身として「本化ネットワーク研究会(以下、本ネ研)」という勉強会があったことをご存じの方は多いと思います。本ネ研では、勉強会のテーマを隔月ごとに理論分野と実践分野に入れ替えましたので、実践的なテーマでは侃々諤々の議論が延々と続くこともありました。

その多岐にわたるテーマの中でも、昨年からのウクライナ戦争によって、ますます重みを増してきたのは、西山理事長の盟友であった望月哲也先生が提唱して、平成十八年の夏期セミナーの総合テーマにもなった「常不軽国家日本の建設」という言葉です。この「菩薩国家」をめざしたスローガンは、「憲法九条」が即ち「不軽行」に他ならないことを表しています。戦争放棄の憲法九条を実行することは、他者を敬い、授記の言葉を語りかけ、迫害にあっても非暴力に徹する、不軽菩薩の忍辱の修行と重なります。あるいは常不軽国家とは、マハトマ・ガンジーの非暴力主義を、「国」として実行することだといってもいいでしょう。

思想家の柄谷行人氏は『憲法の無意識』(岩波新書 二〇一六)のなかで、カントの永遠平和論とは「戦争の原因である国家間の敵対性が終わる」ことであり、その平和論を具体化した憲法九条は、日本人の無意識となつて定着しているとして、「九条を実行することは、おそらく日本人ができる唯一の普遍的かつ「強力」な行為です」と述べています。不軽行とは、敵がいらない、他者を怖れない「無敵」の修行です。そう考えると憲法九条の実行もまた、「無敵」だからこそ、普遍的な「強力」な行為となるのだと思います。

その逆になります。隣国の脅威に対して敵対性を解消するのではなく、ひたすら軍備費増強で敵対性を高めていけば、戦争は必然です。「不軽国家日本の建設」という、本ネ研で十七年前に論議されたこのテーマは、いまこそ具体的に「設計図」を描きながら実践化を検討して、高く掲げていく必要があると思います。

こうした本ネ研の成果を引き継いで誕生したのが、「法華コモンズ仏教学林」です。この「法華コモンズ」という名称も、西山理事長が命名したのですが、実に日蓮教学の再歴史化にふさ



※令和元(二〇一九)年の受講風景から。早くこの会場の雰囲気に戻りたいですね。

わしい時宜を得たネーミングでした。詳しくは、本学林のブログに理事長が書かれた「法華コモンズのめざすもの」という項目があり、そこに、①当学林の学是、②社会成仏の宗教、③コモンズやコモンとは何か？ ④法華コモンズがめざすもの―「不軽精神」による仏国づくり―、と四章にわたる説明文がありますので、ご参照ください。

その説明のなかでも触れられている齋藤幸平氏は、ソ連や中国のような国家資本主義となったマルクス・レーニン主義を否定し、後期マルクスが考えた環境問題を含む「コモンの再生」という未来プロジェクトに注目します。そして、グローバル資本主義の不平等を解消するため、あらゆるものを「商品化」する貨幣経済を脱し、人と自然の関係を快復する「コモニ化」への大転換を提唱しています。それは、上からの変革ではなく、下からの相互扶助グループでのボトムアップ方式によって達成可能となる、「脱成長コミュニケーション」という共同体づくりであると述べています（『ゼロからの資本論』NHK出版新書）。

「法華コモンズ」という名称は、このような齋藤氏の新たな共同体づくりの提案も取り上げて、検討することができる言葉です。というのは、法華Ⅱ立正であり、コモンズⅡ安国（理想の共同体）として、日蓮門下の使命である立正安国を今に再歴史化した言葉が、「法華コモンズ」だからです。

ですから、④の「不軽精神」による仏国づくり―での課題とは、「コモンの再生」と「常不軽国家日本の建設」を現代の立正安国論として、どのように考えて実行していくかになるでしょう。

西山理事長は、その具体化のために「四菩薩プロジェクト」を呈示しています。本学林はその四菩薩のうち無辺行プロジェクトの究理潤世、つまり学びによる菩薩行を担っています。その他の上行（立正安国）、浄行（洗心浄土）、安立行（抜苦与樂）プロジェクトの実践は、他団体が担っていて法華コモンズ独自の展開はまだありませんが、学びも実践であり、実行力と一体の行動です。

齋藤氏も、「労働」において構想と実行は一つだったが、資本主義はそれを分離させた、というマルクスの言葉を紹介していますが（前書一〇二頁）、学びごと（構想力）は実行力と一つなのです。学びがなければ実行はできません。構想力あつての実行力です。

ですから立正安国の実行は、すでに本学林の講義の場から始まっています。その多岐にわたる講義の場で講師と受講生が練磨研鑽して生み出していく構想力こそが、法華コモンズⅡ立正安国のめざすものを具現化していくのだと思います。その意味でも、本学林の学びの場こそが、他のプロジェクトの構想が立ち上がり、その実践が交流し合っていくプラットフォームになる必要があるでしょう。

本年度の前期も、本紙の十一頁にあるように多彩な講師による必聴の講座を開講いたします。また、受講パンフレットに載っていない講座企画も開講準備中です。本学林は、皆様の未来を拓く学びの場となるように、またその成果を共有していきたいように、その運営にますます精進していきたいと思っております。本年度もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

合掌

## 講義報告

### 一日集中講座

講義と対談によるシンポジウム

## 「偽書が生み出した日本仏教」

講師 佐藤弘夫先生×菊地大樹先生

報告 芹澤 寛隆

十一月十二日（土）、法華コモンズ二〇二二年度後期、一日集中講座として、講義と対談によるシンポジウム「偽書が生み出した日本仏教」が新宿常圓寺祖師堂「地階ホール」を会場に、オンラインと併用して開催されました。東北大学大学院文学研究科教授・佐藤弘夫先生、東京大学史料編纂所教授・菊地大樹先生を講師にお招きし、それぞれの先生にご講義いただいた後、対談と質疑応答が行われました。

講義Ⅰとして「顕現する仏たち―「生身」と中世仏教―」という題で佐藤先生がご講義されました。佐藤先生は、中世仏教研究の流れが近代以降どのようであったのかを丁寧にお話しされ、特に近年、日本仏教研究の主戦場が近代仏教へと変わっていった流れをわかりやすく話されました。

その上で、いま学界並びに宗教者が直面する課題として、祖師の教えを現代に蘇らせるためにはどうすればよいかというものが、その解明のためには祖師の信仰体験を通じて、非整合性であっても、そこに光を当てることで鎌倉仏教像を再構築できるのではないかとの見解を示されました。

次いで実例として日蓮、親鸞を挙げ、その思想の

核心に論証不可能な部分や誤読があること、「回心」すなわち発想の転換や飛躍を生み出す「体験」があったこと、そうした論理を超えた宗教体験を組み込むことで日蓮をはじめ鎌倉仏教祖師像の再構築が可能であることを、具体例として親鸞の夢告、日蓮の『不動愛染感見記』・虚空蔵菩薩感見を挙げつつ講義されました。

その上で、中世当時「現世」と「他界」を結ぶ重要な媒介者として「生身（しようじん）の存在があること、「生身」とは、目に見えないはずの仏がその人のためだけに姿を現したものであり、きちんとした手続き、霊場参詣や参籠、さらには見る者の智慧を踏まえれば誰でも体験できるという共通認識、すなわち全ての人が不可視な「他界（あの世）」の救済者とコンタクトできるという認識が、偽書を生み出す思想的土壌となっていたのではないかと論じられました。

その後の流れとして、こうした中世世界の共通認識は十四世紀に入ると世俗化や科学の進歩が進み「他界」が急速に萎み、「現世」の割合が大きくなることにより急速に変化し、中世的偽書が生み出されなくなっていくと述べた上で、現代までの流れを解説していただきました。

「生身」を見ると言うこと、宗祖の宗教的体験の相対化という視点から中世仏教研究の流れを論じていただき、聴講者一同新たな視点に大きく刺激を受けました。

次いで講義IIとして、「偽書と伝授—語りえぬものを語ること—」という題で菊地先生が講義されました。



菊地大樹先生（左）と佐藤弘夫先生（右）

菊地先生は、まず日本史研究の立場から、「正史」であっても家力や権威からのバイアスが存在しており、その「正統」に対して正しき・本質が議論され、追求されるときに偽書・偽文書が生み出されると主張されました。そして、「正史」編纂が放棄されると、「歴史物語」に歴史叙述が委ねられること、「物語り」によって叙述される歴史が残されているのが中世であったと、時代の特徴を示されました。次いで、偽書生成の理由について、キリスト教世界や中国の訳経事業や經典編纂を例に多角的に説明されました。これらの例では常に権威によって「正統」が作り出され、それに対する者として「異端」が生まれ、「異端」に含まれるものの中に「偽書」があること示されました。

その上で、日本における「正統」と「異端」を見ると、世俗の権力、教権が社会に押しつ

けた『正当性』が「正統」につながるものであるが、中世は特にこうした世俗の権力、教権が弱まった故に「偽書」が生成されることになった、と具体例を挙げつつ明瞭に論じられました。

偽書について「正統」と「異端」という視点からキリスト教世界を含めて多角的に論じて頂き、聴講者一同新たな視点を頂けたことに大きく感銘を受けました。

お二人の講義の後、会場並びにオンラインから多くの質問が出されましたが、両先生はともども丁寧に答えてくださいました。

次いで、お互いの先生が互いの講義に対しての質疑、講評が行われました。

まず菊地先生から佐藤先生に感想として、中世独特の偽書を作り出すメカニズムについて、「生身」や「聖」なるものに触れることで、「始め」の物語を語りたいたいと思った瞬間に偽書が生まれること、すなわち会ったことのないものが自分の口を借りて語り出すときが偽書を生み出す瞬間だったのではないかと佐藤先生が語った視点に共感を得たと述べた上で、近代における科学と宗教の関係についてなど、鋭い質問がなされ、佐藤先生もそれに丁寧にお答え頂きました。

また佐藤先生からは、中世仏教の祖師研究を通じて、文化史、思想史等を書き換えるような研究が望ましいと述べた上で、菊地先生が講義された「正統」と「異端」の問題について、中世は「正統」のない時代であるが、「異端」が立ち上がったときには批判の立場が存在している。その存在を「正統」と結び

つけて考えられないかという質問がなされ、菊地先生も丁寧に回答されていました。

最新の研究に基づき、非常に幅広い議論がなされ、長時間にもかかわらず、会場、オンライン共に活気に満ちたシンポジウムでした。改めて両先生に感謝申し上げます。

## 講義報告

### 末木文美士先生

## 仏教哲学再考

### ―『八宗綱要』を手掛かりに―

報告 佐古 弘純

現在の日本仏教研究の第一人者として数多くの功績をあげながら、なお果敢に新たな学的挑戦を続ける末木文美士先生による連続講座、「仏教哲学再考―『八宗綱要』を手掛かりに⑤」の本年度後期分が開催されました。

本講座は、末木先生の講義概要に「応用的に問題を広げ、手探りして検討していきたい」とある通り、末木先生が哲学的な見解や、最先端の研究成果を交えながら講義して下さるため、現在の日本の仏教研究を再認識したい方にとっては大変貴重な講義となっております。以下、ご報告いたします。

第一回目の講義は、テキスト『八宗綱要』付章「禅と浄土」(四三二頁)の禅宗についての講義が行われました。

はじめに、禅宗の系譜について、初祖達磨から五

祖弘忍に至り、弘忍の弟子である神秀と慧能が北宗(漸悟)と南宗(頓悟)に分かれていったことを説明されました。さらに、慧能の系統である馬祖(日常がそのまま悟り)と石頭(本来の自己を悟る)の思想が違うことを解説されました。次に、座禅の精神安定・精神集中を目的とする「禅」から、無念無想とする「達磨系の禅」に至った流れに加え、「煩惱を払って」いく神秀の考え方と、「本来無一物」とする慧能の考え方を示されました。最後に、日本の「禅」を古代(神秀から最澄)・中世前期(総合仏教、兼修兼学時代)・中世後期(宗派化、五山文化)に分けて解説され、講義終了となりました。

第二回目の講義は、テキスト『八宗綱要』付章「禅と浄土」(四三六頁)の浄土宗についての講義が行われました。

はじめに、浄土宗の系譜と教判(浄土門・聖道門)をテキストで確認し、補足として凝然撰『浄土法門源流章』を引用し、法然以前と法然門下の系譜について解説されました。次に、『無量寿経』は五存七欠とされているが、最初から五存のみであることに加え、異訳の一つである『大



末木文美士先生

阿弥陀経』には「模範としての仏」と「救済者としての仏」が示されていることを示

し、現存している会本を比較することで、思想の発展が明らかになる、と指摘されました。また、『観無量寿経』は前十三観と九品段(後の三観)に分かれ、前十三観は禅・三昧に連なる観想念仏(唯心の浄土)、九品段の下品には悪人往生が説かれており、悪人往生の道を開いた善導の解釈が、法然に影響をあたえた、と解説されました。続いて、法然『選択本願念仏集』の全体の構成を説明した後、法然が善導と夢で対面したことに加え、「難易義・勝劣義」と「浄土門・聖道門」という新しい教判をもって浄土宗の系譜としたことを示されました。最後に、法然門下である証空・長西・親鸞それぞれの解釈を明らかにし、『八宗綱要』読了となりました。

第三回目の講義は、応用的に問題を広げ、「鎌倉仏教の見直し」をテーマに講義が行われました。

はじめに、鎌倉新仏教中心論について触れて、戦後に歴史学者の近代合理主義的解釈にもとづき提唱されたが、黒田俊雄の顕密体制論により「新仏教の祖師たちは中心ではなく異端だった」と批判され、現代においては終焉をむかえた、と指摘されました。そして鎌倉仏教も含んだ「中世仏教」の思想を検討して、仏教によって国家を導く平安初期(鎮護国家)から、個人や在家を中心とした平安中期(仏教の私化)への変容を確認し、平家によって焼討にあった南都の復興運動を開始した後白河法皇と重源が、新しい中世仏教の最初の出発点であった、と示されました。

続いて、鎌倉期へとつなぐ思想として栄西の密教に焦点をあて、教主論(自性身説法)・身体論(理智

冥合を男女合一の譬喩で説明）・顕密優劣論・易行化（陀羅尼）について解説されました。最後に、鎌倉期の仏教の展開を三期に分け、三期目にあたる日蓮と同世代で八宗兼学の無住に焦点をあてました。

そして、諸行併修を理論づけた著作である無住の『聖財集』を取り上げ、四句分別を応用して変形することで、一つを選択するのではなく多元的な価値の可能性を理論づけている、日本における四句分別の展開のひとつとして注目に値する、と指摘して講義終了となりました。

最終回は、「本覚思想と日蓮教学」をテーマに講義が行われます。教学委員の花野先生も参加されており、両先生の最前線の見解を聞くことができ、最終回にふさわしい大変刺激的な講義になると思います。なお、本講座はオンライン開催となっており、講義動画も受講者に配信し、期間内であれば何度でもみることが可能です。今回は二月十一日（土）に開催いたします。皆様、聴講の申し込みをお待ちしております。

長期にわたった末木先生による『八宗綱要』の講座が今期で終了となります。日本仏教の様々な問題点を浮き彫りし、さらには質疑応答にも的確に答えていただきました末木先生には、聴講者一同、心より感謝申し上げます。

また当学林での末木先生の新たな講座は、ご著書の『仏典を読む―死からはじまる仏教史』をテキストにして本年十月からの後期講座で開催していただく予定となっております。またご案内いたしますので、楽しみにしてお待ちください。

## 講義報告

## 法華仏教講座

【令和四年度 前期】

第四回 水谷進良先生

第五回 都守基一先生

第六回 花野充道先生

【令和四年度 後期】

第一回 西山明仁先生

第二回 望月海慧先生

第三回 松尾剛次先生

### 報告 担当スタッフ

本講座は法華コモンズの前身・本化ネットワーク研究会での講義形式を踏襲し、およそ月一回のペース、毎回二時間の枠で執り行われている。講師は、斯界で注目されている学者・研究者を毎回交代制でお迎え申し上げる形である。ここでは、令和四年度の前期第四回～六回と後期第一回～第三回の講義について報告したい。前期第四回は、コロナ禍の深刻な影響を考慮したZoomでの実況型講義となったが、以降は全て常円寺様祖師堂地階ホール会場とし、Zoom 実況配信を同時に行うハイブリッド型の対面講義が執り行われた。各回全て、土曜日午後四時三〇分頃の開催。各回ともに聴講者が多く、時間を三分前後延長しての活発な質疑応答が行われた。なお、講義は全回、受講者にビデオ配信されている。

### 《令和四年度 前期「法華仏教講座」》

#### 【第四回 水谷進良 先生】

令和四年（以下同）七月三十日、水谷進良先生による「堅樹院日寛教学をめぐって」の講義が執り行われ

た。当初は常圓寺様を会場とし、Zoom 実況配信を同時に行うハイブリッド型の対面講義を予定していたが、コロナ禍の状況を考慮し、Zoom のみでの実況型講義となった。

水谷先生は、立正大学日蓮教学研究所研究員を経て、現在、日蓮宗現代宗教研究所研究員として活躍されている気鋭の研究者である。

堅樹院日寛（一六六五―一七二六）は、日蓮教学史上、江戸時代の勝劣派を代表する教学者であり、大石寺教学を体系化した学匠として著名である。

講義では、先ず、日寛による大石寺教学体系化の背景を論じられ、次いで、『日寛上人伝』『統家中抄』や近時の先行研究を吟味しながら、日寛の生涯について、生い立ち、出家、細草檀林での修学、蓮藏坊学頭時代、大石寺二六世晋董と蓮藏坊再往、『六卷抄』再治と遷化の順で講じられた。

次いで、主著『六卷抄』をはじめ日寛の著作の全体像を細かく解説していただき、日寛教学の特質が、『本因妙抄』『百六箇相承』等のいわゆる相伝書の重用に存することを確認された。日寛は、相伝書の指南をもって

水谷進良先生

日蓮遺文を理解することに  
よって、本門  
寿量品の文底  
に基づく宗旨  
を立て、過去  
仏としての釈  
尊は働きを終  
え、末法には

釈尊にかわって下種を施す日蓮聖人を本因妙教主とするという教義を樹立したことを細説され、その立場から日寛が広蔵院日辰の教学について加えた批判内容の要点なども示された。

日蓮教学史研究上のキー・パーソンの一人である日寛教学について、客観的立場から、最先端の学術的レベルで丁寧な講義して下さった。(布施義高 記)

### 【第五回 都守基一 先生】

八月二十七日、都守基一先生による『開目抄』再考―撰受折伏を中心として―の講義が開催された。講師の都守先生は、現在、日蓮仏教研究所主任にして、立正大学・身延山大学でも講義を担当される、日蓮教学研究の泰斗である。

都守先生は、日蓮聖人遺文中もつとも長編の『開目抄』は、三大部の一つであり、唯一、譬喩による命名の特別な書であることを最初に指摘され、同書で示される重要法門の数々の内、今回は特に、今成元昭氏らによる「平成の撰折論争」を承け、『開目抄』を中心に、撰折論について極めて詳細に講じてくださった。

『開目抄』では、『摩訶止観』『摩訶止観輔行伝弘決』

『法華文句』

『涅槃経疏』

『涅槃経』が

引用されな

がら撰受・折

伏が細論さ

れ、末では、

日蓮聖人が

念仏禅宗を呵責(折伏)することによって、為彼除悪、日本国の諸人の父母となり、後生に大楽を受く、と結ばれていることを正確に読み解いてくださった。

また、講義では、「常不軽品のごとし」の文が『開目抄』真蹟に存したか否かという問題を検討され、他の日蓮聖人遺文に見られる撰折論の変遷や、『観心本尊抄』で示された末法における本化地涌四菩薩の撰折論(折伏―賢王―誠責愚王、撰受―僧―弘持正法)などについて、極めて貴重な所見を拝聴させていただいた。

都守先生が今回、日蓮聖人のいう撰受・折伏について、学術的に今日の最高水準で明らかにされた功績は甚大である。その詳細は、近々に論攷として公にされるであろう。(布施義高 記)

### 【第六回 花野充道先生】

九月十日、花野充道先生による「日蓮教学における教観論と種脱論」の講義が執り行われた。

周知の通り、花野先生は、平成二十一年に論文『天台本覚思想と日蓮教学』によって早稲田大学から博士(文学)を授与され、現在、法華仏教研究会主宰と当学林教学委員を勤められている。また平成二十五年に刊行完結をみた『シリーズ日蓮』全五巻(春秋社)の代表編者として刊行を牽引。近時は『花野充道博士古稀記念論文集』が出版されるなど、その活躍は斯界で光彩を放っている。

今回、花野先生は日蓮教学・教学史研究上の最重要課題である教判論について、教観論・種脱論との関係から、詳細に論じられた。その間、諸門流の著名教学者の特徴と教理的な課題となる事柄を逐一、鋭い切り口

をもってご指摘いただいた。講義後半では、『観心本尊抄』の一節についての解釈との相関性を辿りながら、日蓮聖人滅後における全体的な教判理解のダイナミズムを講じてくださった。

また、講義全体を通して、花野先生は、宗学の世界における専門用語や一種独特な言い回しを、現代の一般人に理解できるように分かりやすく噛み砕いてアウトプットする努力の必要性を力説された。

日蓮門下各門流の指導者や学徒を啓蒙する、刺激的且つ有意義な講義であった。(布施義高 記)



### 《令和四年度 後期「法華仏教講座」》

#### 【第一回 西山明仁 先生】

十月二十九日、西山明仁先生による「日蓮花押の母字について」の講義が開催された。西山先生は、当学林スタッフで、法華宗(陣門流)学林教授を勤める注目の研究者である。

今回のテーマは日蓮聖人の花押をめぐる問題という大変興味深い内容であり、日蓮聖人研究の第一線で活躍する多くの研究者が参加し、また、西山先生が所属する法華宗(陣門流)からも多くの聴講があった。

日蓮聖人の花押については、これまで、梵字(バン字↓ポロン字)とする説や、妙の字とする説が特に有力



西山明仁先生

祝されてきたが、西山

先生は、そうした先人観から一度離れて検討を試みることの重要性を指摘。能筆家でもある西山先生は、日蓮聖人花押の筆づか

い、細かなタッチにまで目を配り、精査熟考を経て、その母字は「蓮」である蓋然性が高いと一つの見方を示された。また、日蓮直弟子や門下諸師の花押も微細に一覧された上で、日蓮聖人花押Ⅱ「蓮」の可能性の高さを示された。

分かり易く大変に説得力のあるプレゼンテーションであり、これまでの学説に再考を迫り、今後の研究に新生面を切り拓いた貴重な講義であった。

(布施義高 記)

### 【第二回 望月海慧 先生】

十一月二十六日、望月海慧先生による「チベット仏教の他空説の源流について」の講義が執り行われた。

望月先生は、身延大学の副学長、教授を勤められる仏教研究の碩学である。



望月海慧先生

今回、望月先生は、仏教の根本教理である「空」について、しかも極めて学習の難しいチベット仏教を視点に講じて

くださった。

望月先生は、講義の最初に、チベット仏教の空性理解には、【①存在自身の自性を空とする「自空説」……ゲルク派のツォンカバ（一三五七―一四一九）等の立場】【②仏性を除く他の存在を空とする「他空説」……チヨナン派のトルボバ（一二九二―一三六一）等の立場】という、凡そ二系統があることをご教示くださった。

この構図を講義の起点としながら、望月先生は、以下、般若経典に見られる「空・無自性」や如来蔵経典に見られる「如来蔵・仏性」、また、中観学派と瑜伽行唯識への影響、あるいは比較考証など、実に様々な角度から空の本質論を掘り下げて講じてくださった。

仏教思想の根本的世界観を平易かつ体系的に解説してくださる、大変画期的な講義であった。

(布施義高 記)

### 【第三回 松尾剛次 先生】

十二月二十四日、松尾剛次先生による「日蓮伝再考〜日蓮神話を超えて」の講義が執り行われた。

松尾先生は、山形大学教授、東京大学特任教授、ロンドン大・ニューヨーク州立大・北京外大等で客員教授、

また、日本仏教総合研究学会の初代会長をお勤めになり、現在は、山形大学（名誉教授）・早稲田大学で教鞭を執られ、日本仏教史研究の大家として広く知られている。

本講義の狙いとして松尾先生は「これまでと異なる視点から日蓮伝を見直す」と述べて、神話に彩られた日蓮伝について歴史学的視点から再考を試みて

いる。

まず中世の基本的な僧の在り方に、おもに鎮護国家の祈祷を行い、特権と制限を併せ持つ官僧と、個人の救済に主眼を置き、官僧に比べて自由な活動が許された遁世僧の二種類があった、と指摘。日蓮は比叡山延暦寺で受戒し官僧としてスタートし、建長五年に立教開宗したのは遁世僧として活動した。

次に日蓮の生涯について考察する上で考察対象となる日蓮遺文について、記憶違いや神話が書かれている可能性があるため、たとえ真蹟遺文であってもその内容を批判的に検討する必要がある。また日蓮と忍性について、日蓮が忍性を批判する背景に、教義思想の問題のみではなく、信者争奪などの様々な問題があったのではないかと。

最後にこれまで不明確とされてきた日蓮の戒壇論7について、『三大秘法抄』に説かれる戒壇論の内容から、日蓮は迹門・理の延暦寺戒壇に対し、本門・事の戒壇の建立をイメージしていたのではないかと。

以上は講義の一部を要約して紹介したものである。松尾先生は六二頁に及ぶ重厚なレジュメをご用意くださり、膨大な資料を凝縮して分かりやすく講義

くださった。講

義終了後は、聴

講者から熱心

な質問が寄せ

られ、一つ一つ

に丁寧に対応

された。



松尾剛次先生

(西山明仁記)

## 震災転移論

## 末法の世に菩薩が来りて衆生を救う？

## 報告 澁澤光紀

極めて意欲的で実験的なオンライン講義となった磯前先生の講座は、十月三日(月)にスタートした。

第一回目は、「傾聴の限界 石巻——翻訳不可能な起源」で、前奏曲として世界を感涙させた「この世界の片隅に」の映像と共に、コトリンゴが歌う「悲しくてやりきれない」が流れる。「このやるせない悲しさの救いはあるだろうか？」と語りかける透明な声により、聴衆は悲しみの感受性を開いていく。

講義は、抑えた語り口の磯前先生の説明で、沢田研二が主演した『太陽を盗んだ男』の一場面や被災した石巻の数々の映像が流され、精神科医の北山修やフロイト、ラカン、哲学者のデリダやベンヤミンの言葉も映されて、「傾聴の限界」が物語られていく。

磯前先生は打合せ時に、「ロードムービーのような講義をしたい」と話されたが、まさに受講者は石巻の被災現場の説明を聴いて、その場を一緒に歩きながら数々のことを考えさせられていく。悲しみは共有できるか？ 当事者ではないのに？ 翻訳不可能なこと？ 他者と私、そして学問とは一体何か？

最後は、「心の傷の癒し」を終わりに雨に祈るようなXジャンプの「エンドレスレイン」が流されて、まるでドキュメンタリー映画を観たような講義が終了した。質疑応答では、司会の菅陽子氏が「感想で

も」と声掛けしたこともあって、講義に触発された質問者の体験が語られて、充実した質疑となった。

第二回目となる十一月十四日は「差別論 大阪芦原橋——不可視の社会構造」。前奏曲は、吉田拓郎「人間なんて」。訪れたのは、日本初の人権をテーマにした「大阪人権博物館」、愛称はリバティ大阪。大阪芦原橋に一九八五年開館したが、二〇二〇年に市有地明け渡しで三五年間にわたる活動の幕を下ろした。

リバティ大阪の「リバティ」は解放だが、果たして人間が差別から解放されることできるのか、その答えを求めて「宗教と差別」研究会を作り、昨年に「宗教と差別」全四巻のうち「なぜ私たちは差別するのか」を問う第一巻本が発刊された。磯前先生はこの研究会で、「研究者の当事者性とは何か」に悩んだという。ここで流した沢田研二の「遠い夜明け」の歌詞に仮託して、その頃に磯前先生は、成功した学者としての肩書を捨てて生きようと考えたという。

本の監修者で部落解放同盟浪花支部長の浅井明人さんは言う。「差別とは何かを酒を飲みながら語り合いたい、大学の先生、社会活動家などみんな、自分の論文を仕上げて成果がでるとさよならや」。差別の事実が消えてしまえば、加害者が自らの行為の責任の問われることもなく、被害者が告発することもできない。差別の過酷さは、この「不可視の構造」にあるという。最後に、吉田拓郎の「唇をかみしめて」を流して、講義は終了。質疑の時間では、磯前先生と共に関西の被差別部落の地域を回りたいたの要望も出た。

十二月月十二日(月)の第三回は「死者論 南相



磯前順一先生

馬——「謎めいた他者」と死者」。沢田研二の「時の過ぎゆくままに」の歌声とともに始まった。第一章「青森の原発街道」は、イ

タクの話から始まり、死者との交流によって主体を形成してきた東北という地域に、都会の光りを贈うために原発という闇が造られてきた矛盾を指摘する。そして第二章「南相馬の沢田研二」は、磯前先生の大阪での「沢田研二論」講演に、田老での震災関連死で父と夫を失った女性が参加した時の話だ。彼女は、その時に流したジュリーの「そっとくちづけを」の歌で自殺を思い止まったという。また被災地・南相馬での被災者の心に寄り添う沢田の姿を紹介、その魂に嘯きかける沢田の「表現行為」に感動すること、人が救われることに言及した。

また、被災地に移住した作家の柳美里がその地で、「自分が何をしたいか何をすべきか」略々この世に存在している意味も自分の内にあるのではない」と述べたことを引いて、そう感じたのはある種の回心、認識論的な覚醒であり、私という主体が「謎めいた他者(死者)」によって形成されたのだと指摘する。

第三章「忘れ去られた記憶」では、南相馬の松川浦が「忘れ去られた被災地」と呼ばれ、地域の人々の悲惨な記憶が取り残された状況を語る。光を求める純粋さは、必ず闇をも生み出す。戦前にソウルの南山に造られた伊藤博文を祀る寺が、戦後には朝鮮



## 講義報告

### 大竹 晋 先生

#### 史実・僧侶妻帯世襲

#### ―ブツダ時代から現代まで―

報告 谷口 智

民族の勝利の証しとして、伊藤を暗殺した安重根の記念館となっているという。そして、「誰も無垢なままにはいられない。福島、それは現在もなお続く植民地主義の呼び名なのだ」と結び、講義は終了した。新年に入っの第四回目は、一月十六日の講義で「感染 東京 ―青髭と秘密の小部屋」だ。前奏曲は、中島みゆきの「鳥になって」。悼むということ、「悲哀を噛みしめる」ことが今回のテーマとなる。

第一章「靖国神社の英霊（遊就館）」では、遊就館に納められた戦争花嫁人形と東北のムカサリ絵馬を紹介。また戦前の靖国での「招魂の儀」とは、死者が英霊となることで、悲しみを正反対の喜びに転化させるという「靖国の論理」であったと指摘した。

第二章「悲哀を噛みしめる」では、戦没画学生の絵が常設される「無言館」から、死者に決してとどかない翻訳不能の悲しみについて語り、靖国の論理と対比させる。自分の思いは決して死者には届かないという悲哀を噛みしめることが、断念と受容の心境にいたっていく喪の実践であることを示された。

そして第三章「青髭の秘密の小部屋」では、青髭の秘密部屋も、障子に隠れる夕鶴も、自分の建前で隠した心の本音の闇であると指摘、北山修はその闇を「幼い頃に書かれた心の台本」と見て、四段階に分けた患者と治療者との心の治療法を説明。次回は青髭と夕鶴の新たな物語を語ることを予告して終了。傾聴論、差別論、死者論、転移論、翻訳論、主体化論を盛り込んだ磯前先生の今回の講義は、実に刺激にあふれ、不思議と問題意識が共有されていきます。あと二回、ぜひご聴講のほどお願いいたします。

十月二十二日、二〇二二年度後期連続講座として大竹晋先生の「史実・僧侶妻帯世襲―ブツダ時代から現代まで」全六回が開講の運びとなりました。大竹先生は仏典翻訳家として著名ですが、僧籍を持たれず在家の立場より仏教教団に於ける「妻帯と世襲」という事象について史実を追いながら解きほぐしていかれました。以下第一回より第四回までの報告となります。

#### 第一回 海外篇・古代から現代までの僧侶妻帯世襲

「仏教における僧侶とは何だろうか」という問いかけから、そもそも僧侶という語に対応する梵語は存在せず「僧伽の徒侶」という意味を持つものであり、かつ独身者でなければならなかった。それは異性に対する「愛（渴愛）」が輪廻転生をもたらすものであり、僧侶は渴愛を断ち輪廻を脱することを目的とするからである。それでは開祖たるブツダはその妻ヤシヨードラーと離婚したのであるか？との疑問が生じるが、結論からすればブツダは離婚したのである。では僧侶妻帯はどの地域に発生したのかについてインド、中央アジアから朝鮮半島にいたるまで個々の事例を参照した。次に僧侶妻帯を予言した諸経について考察、本来僧侶妻帯の戒めとして存在した諸経が、日本に於いてはブツダからのお墨付きとして機能したことが明らかにされた。

#### 第二回 日本篇Ⅰ・前近代の僧侶妻帯世襲

#### ―解禁はどう準備されたか―

第一に、そもそも諸宗開祖は僧侶妻帯世襲に肯定的であったのか。中国から日本に至るまでの各宗祖の著作を確認、親鸞を例外としていずれも否定的であった。ではなぜ前近代に於いてそれがおこったのであろうか。実は事例としては古代から見られるものであり、それは発心により出家したのではないからという理由を明らかにした。その例外の親鸞も下級貴族出身であった為「教義からの妻帯世襲」ではなく「妻帯世襲からの教義」発生であったとする。近世に於いては幼年出家が習慣化し、僧侶の資質低下を招いたとする。最後に僧侶の妻の呼称を例示、まとめとなった。

#### 第三回 日本篇Ⅱ・近現代の僧侶妻帯世襲

#### ―解禁はどう定着したか―

近世に於いて国禁であった僧侶妻帯世襲が、明治五年四月解禁された。これに対し浄土宗の傑僧・福田行誠などは反対、その後の論争点を整理した。興味深いのは還俗拒否僧の存在であり、その理由として幼年出家であるが故に、中年で還俗しても職業



大竹晋先生

経験がないため経済上の問題が発生するということ。また地域により妻帯世襲に協力的であったり、プロテスタント教会の牧師が

妻帯していることが、どのように影響したかについて考察した。さらにその妻子の呼称例、諸宗派の宗憲に寺族が明記された時期、管長の妻帯世襲の時期、戦争がどのように影響したかについて明示された。

#### 第四回 日本篇Ⅲ・近現代の僧侶妻帯世襲

##### ―教義はどう変わったか…顕密篇―

僧侶の妻帯により教義の変遷がある、というのが大竹先生の意見である。ではその教義はどのようにして変わっていったのか、これが第四回講義の主題である。主に随方毘尼を以て変化の根拠付けとした諸師が多く、各説を引用してこのような議論は日本のみであって他国ではなかったとされた。その後、具体的にどの宗派が教義変更したのかを検証、自力を旨とする宗派に顕著であり、他力門である浄土系諸派においては影響がほぼなかった。日蓮系も「事実上」他力門へ分類された。さらに宗派内に於いてその教義の監督権を持つ宗学者の妻帯、戒そのものについてどのような変更が加えられたかを見た。

この後、大竹先生におかれましては第五回（二月四日）、第六回（三月四日）の講義をお願いする予定となっております。

## 講義報告

### 菅野 博史 先生

## 『法華経』『法華文句』講義

### 報告 作田 光照

二〇二三年が明けた一月末日の月曜日、朝の気温マイナス一度。朝日がまぶしいが、ピーンと張った

空気が頬をかすめる。昼頃、午前中のラケット運動をサボったので荷物をまとめ、いつもより早めに出発。田舎の駅は閑散としている。約一時間半、都内到着。新大久保駅で降車。韓国街を南に抜けて職安通り沿いの韓国市場へ。二十五度の焼酎「フアヨ」と怪しい韓国調味料「万能の素」を購入し、ホテルにチェックイン。既に十五時、急いで常圓寺へ。ウチを出てから三時間ちよつと到着。

十五時三〇分から福神研究所主催の『摩訶止観』講義開講。もちろん菅野博史先生のご登壇。二〇二〇年二月十七日以降コロナで休講していましたが、二〇二二年八月二十九日から講義が再開しました。

本日も講義メモは科文・翻訳・脚注と充実。摩訶止観第五（下）第四支・破法遍の「また次に、如来が行きたもう時はく」から始業。上段の白文「是故當知汝不可説是絶言之見三假具足苦集成就生死宛然」は、「このために、あなたの不可説は絶言の見である」と知るべきである。「因成仮・相続仮・相待仮」三仮は備わり、苦集は成就し、生死「輪廻」はそのまま備わる」と翻訳。「宛然」とは「そのまま備わっている」という意味。この日で巻第五下が終了。という事は関口真大校注『摩訶止観』（岩波文庫）上巻が了。感無量。二月から下巻の第六（上）「法

を破すること遍

ねかれ」の続き、

「思の仮から空に入る」から始まる。早めに下巻を

靴に入れよう。



菅野博史先生

そして、十八時三〇分。本日も数名の対面聴講生とオンライン聴講生で開始。『法華文句（Ⅱ）』（菅野博史・訳注・第三文明選書5）は、五七二頁（正説分の始め。長い「方便品」第二の最後の五字偈あたりでもうすぐ終わりに。五九二頁から譬喩品第三に入り（Ⅱ）が終了。まもなく（Ⅲ）に突入します。毎回講義メモをご配布いただき講義内容の、科文・経文・訳注を参照しながら一文字一文字の解釈を解説。例えば五七二頁の「時を仮て物を化す」の「物」は「衆生」のこと。「初めに此の処に在りて修治して道を得るが故に、「道場」と言う」の「道場」とは悟りの場であると。書籍と講義メモをグルグル見ながら二十時三〇分、本日も『摩訶止観』から始まる菅野先生のご講義、都合五時間！が終了。お教えいただいている菅野先生はモチロンのことと存じますが、聴講する側も一日に『摩訶止観』と『法華文句』に向き合うことは、大変な修行です。聞いていて、どっちが止観か文句かわからなくなる時があります。毎回先生の講義メモをいただき、漢字の意味を一つひとつとくみ取りながら、解釈していく考え方の方法を教えていただいているような気にもなります。止観も文句も節目を迎えますので、途中からのご参加もお待ちしております。月末の月曜日十八時三〇分開始の『法華文句』講義の同日に、十五時三〇分から同じ場所で福神研究所主催の『摩訶止観』講義も開催です。ご遠方の方はオンラインでもご覧いただけます。でも、お近くの方は是非ライブで『摩訶止観』『法華文句』講義にご参加ください。잘 부탁드립니다!

# 法華コモンズ仏教学林 前期講座一覧

2023(令和5)年度前期講座 開講:4月~9月

《 対面講義が不可の場合は、開催日時でのオンライン講義、または講義動画配信にて開講します 》

- 一日集中講座「中観思想とはなにか-その成立と展開-」 対面&実況  
開講日時：6月3日(土) 午後1時30分~5時30分 講師：斎藤 明  
【受講料】1回分5,000円
- 集中講座「鎌倉仏教研究史について~官僧・遁世僧論の立場から」全2回  
開催日時：7/1と9/16の両日 午後1時30分~5時30分 講師：松尾 剛次  
第1講義 7月 1日(土)「鎌倉新・旧仏教論、顕密体制論を超えて」  
第2講義 9月16日(土)「官僧・遁世僧論の提起と日蓮」  
【受講料】1回分5,000円
- 歴史から考える日本仏教⑩「日本の偽書・偽文書を読み解く」全5回 対面&実況  
開催日時：原則第2火曜日 午後6時30分~8時30分 講師：菊地 大樹  
第1講 4月11日(火) 偽書・偽文書とはなにか  
第2講 5月 9日(火) 偽書・偽文書の生れる伝授の場  
第3講 6月 6日(火) 中世「神話」と偽書・偽文書  
第4講 7月11日(火) 生まれ変わる近世の偽書・偽文書  
第5講 8月 8日(火) 地域社会と偽書・偽文書  
【受講料】10,000円(全5回の講義分)
- シリーズ講座「法華仏教講座」全6回 開講時間 午後4時30分~6時30分 対面&実況  
第1回 4月 1日 「天台大師所説の禅観と止観」 講師：大松久規  
第2回 5月27日 「『科註妙法蓮華経』と日蓮門下との関わりについて」 講師：大平寛龍  
第3回 6月24日 「『法華義疏』について」 講師：魚住孝至  
第4回 7月29日 「一念三千の現代的解釈」 講師：三輪是法  
第5回 8月26日 「近世後期の日蓮信奉者 深見要言について」 講師：坂井法暉  
第6回 9月30日 「智顓教学と日蓮教学の仏身論」 講師：花野充道  
【受講料】12,000円(全6回の講義分)
- 連続講座「『法華経』『法華文句』講義」全6回 対面&実況  
開催日時：最終月曜日 午後6時30分~8時30分 講師：菅野 博史  
第1回 4月24日 / 第2回 5月29日 / 第3回 6月26日  
第4回 7月31日 / 第5回 8月28日 / 第6回 9月25日  
【受講料】12,000円(全6回の講義分)

【会場】新宿常円寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿7-12-5 電話03-3371-1797(寺務所)

【申込】受講講座名・氏名・住所・連絡先を明記して送付 ⇒ FAX: 042-627-7227

mail: hokkecommons@gmail.com / ブログ: <https://hokke-commons.jp/>

192-0051 八王子市元本郷町1-1-9 善龍寺内 **法華コモンズ仏教学林 事務局**

# 賛助会員一覧（敬称略）

※令和四（二〇二三）年度分

## 個人会員 ※1口 一万円

6口	小松 正学	2口	菅野 博史
6口	松原 勝英	2口	間宮 啓壬
6口	中野 顕昭	1口	長谷川正浩
3口	持田 貫信	1口	菊地 大樹
3口	西山 英仁	1口	濫澤 光紀
3口	鈴木 正巖	1口	鍋島 真永
3口	村上 東俊	1口	互井 観章
3口	竹内 敬雅	1口	匿名 希望

## 法人会員 ※1口 五万円

2口	東洋哲学研究所	2口	天龍寺
2口	持法寺	2口	立行寺
2口	本國寺	2口	本妙寺
2口	善龍寺	1口	摩耶寺
2口	大久寺	(以上)	

## 特別支援団体

本多日生記念財団 36万円

※本多日生記念財団様からは、本学林の前身となる本化ネットワーク研究会の時代から、毎年継続して多額のご支援を頂いております。

◎皆様の「賛助」支援に篤く感謝申し上げます。

## 年間賛助会員加入のお願い

法華コモンズ仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を新学期時に募集しています。下記の要領にて、受付しておりますのでぜひご協力のほどお願いいたします。

### 【年間賛助会員 加入申込み】

- 個人会員 1年間1口（1万円）
- 法人・団体会員 1年間1口（5万円）

### 《お申込み年度の特典》として

- 個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を差し上げます
- 法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を差し上げます

※「年間フリーパス受講証」は、開設の全ての講座を一年間にわたり受講することができます。

●お申込み頂ける方は、右の内容を書いて、表紙タイトルまた7頁下にあるメールアドレス、ファックス、ブログからお申し込み下さい。

★ 個人か法人か、また何口かを明記する。

★ 名前、年齢、住所、電話、ファックスまたはメールアドレスを明記する。

●直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて通信欄に口数をご明記の上、同封の振込用紙が、下記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】 法華コモンズ仏教学林

【口座番号】 0015007-634712

## 「講座映像版」販売のお知らせ

○ 菊地大樹先生「吾妻鏡」と鎌倉仏教」6回

○ 池上要靖先生「初期仏教研究」6回

○ 菊地大樹先生「歴史から考える日本仏教」

- 鎌倉時代を射程にいれて
- 《顕密問題》を考える
- 日本宗教史の名著を読む
- 鎌倉仏教史の名著を読む

※①～④まで各講座それぞれ6回の講義

◎ダウンロード版：価格一万二千元（消費税込）

全6回講義の動画ファイルとレジユメPDF

◎DVD版：価格一万二千五百円（消費税・送料込）

全6回講義のDVD6枚組とレジユメ印刷物

◆詳細はブログ(<https://hokke-commons.jp>)参照。

■【本化ネットワーク叢書】 頒価一冊二千円+送料

○ 叢書(2) 『「九識説」とは何か』

○ 叢書(3) 『本門戒壇論の展開』

## 法華コモンズ通信 第十号

○発行日 二〇二三（令和五）年二月十六日

○編集発行 法華コモンズ仏教学林

○発行所 法華コモンズ仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町二一九

【FAX】 042（627）7227